特別な配慮を必要とする子供たちに着目した学校改善に関する研修の研究

平成 29・30 年度上越教育大学研究プロジェクト（特別研究）

研究報告書

平成 30 年 3 月

小高さほみ・菅原 至・原 瑞穂・堀 健志

はじめに

本報告書は，平成 29・30 年度上越教育大学研究プロジェクト（特別研究）「特別な配慮を必要とする子供たちに着目した学校改善に関する研修の研究」の成果の一部をまとめたものとなっています。

本報告書を開いてくださった読者のみなさまは，「特別な配慮を必要とする子供たち」と聞いて，どのようなことを想起されるのでしょうか。本研究プロジェクトは，「インクルーシブ教育」の制度等が充実していく中で，「周辺化されがちな子ども」（例えば，外国につながる子ども，性的マイノリティ，家庭に難しい事情を抱えた子どもなど）と学校や教員に，研究者がどのように向き合い関わっていくのかという問いが出発点となっています。

研究を立ち上げたメンバーは，本学の専門職学位課程（教職大学院）と修士課程と所属を異にするものの，学校臨床社会学という点でつながっています。それぞれの教育・研究経験を活かして，「特別な配慮・対応を必要とする子供たち」について考える「研修」を，企画あるいは支援し実施することに重点を置きました。教員による自主的な勉強会をはじめ悉皆研修について，さまざまな学習形態・方法を模索し，現職教員・大学院生や専門家を交えて検討し，実施しました。

たとえば，「社会的な困難や不利を経験している子どもたち」の公開勉強会では，映画上映後に教育社会学者・知念渉先生の講演会と地域の行政担担当者や「子ども食堂」代表者の実践報告と参加者との意見交流などを行いました。また，教室で外国につながる子どもや ALT に出会ったら，教師としてどうかかわるのかを考えることをテーマとした教員養成向け研修では，「グローバル化の帰結としての教育の国際化」に関する講演会を開催しました。

本報告書では，これらの研修の概要に加え，講演会「教育の国際化」―箕浦康子先生「文化的背景の異なる子どもたち」，浅井亜紀子先生「ALT との関係構築」―の配布資料を，ご承諾を得て掲載しました。「文化的背景の違う子どもや ALT をどう理解するか」は，本学の教員養成課程の学生・大学院生及び現職教員大学院生が，教育実習校や異動先の学校でも直面することと考え，公開をお願いしました。紙幅の関係から，他の研修資料を掲載できなかったことをお詫び申し上げます。

本報告書が，「特別な配慮・対応を必要とする子供たち」に関わる教育関係者のみなさまの一助となれば幸いです。本報告書を開いてくださった読者の方々にお礼申し上げますとともに，忌憚のないご意見をいただければと思います。

研究者代表　小高さほみ

目　次

はじめに　1

研究プロジェクト活動一覧　3

1.「特別な配慮を必要とする子供たちに着目した
学校改善に関する研修の研究」の概要　5

2. 講演会「教育の国際化」発表資料

2-1 箕浦康子先生発表資料
「教育の国際化―文化的背景の違う子どもをどう理解するか―」　10

2-2 浅井亜紀子先生発表資料
「教育の国際化―ALT とどのように関係を築くか―」　14

3. 本プロジェクト研修の概要　17

研究プロジェクト活動一覧

研究課題　特別な配慮を必要とする子供たちに着目した学校改善に関する研修の研究

研究期間　平成２９年度～平成３０年度

研究体制

研究分担者（平成 30 年度のみ分担者は＊）	
小高さほみ	上越教育大学大学院　修士課程　（研究代表者）
菅原至	上越教育大学大学院　専門職学位課程（教職大学院）
原瑞穂	上越教育大学大学院　専門職学位課程（教職大学院）
堀健志	上越教育大学大学院　専門職学位課程（教職大学院）
辻野けんま	上越教育大学大学院　専門職学位課程（教職大学院）＊
河野麻沙美	上越教育大学大学院　修士課程
小林啓一	妙高市教育委員会・教育長＊

研究協力者（活動実施順，所属等は活動実施日）	
知念渉	神田外語大学講師
金子光洋	いちょう食堂代表
内藤祐子	上越市役所健康福祉部子ども課課長
石山崇	「さとにきたらええやん」上映会@上教大実行委員会（大学院生）
川村修央	「さとにきたらええやん」上映会@上教大実行委員会（大学院生）
熊倉和耶	「さとにきたらええやん」上映会@上教大実行委員会（大学院生）
三田村尚子	「さとにきたらええやん」上映会@上教大実行委員会（大学院生）
箕浦康子	お茶の水女子大学・名誉教授
浅井亜紀子	桜美林大学・教授

研修一覧

平成２９年度

開催日	場所	研修名・講師等
2／22	講 201	「さとにきたらええやん」上映会＠上教大　公開勉強会
		第一部「さとにきたらええやん」上映会
		第二部　講演「貧困状態にある子ども・若者を社会につなぐ」 講師：神田外語大学講師　知念渉氏 実践報告「福祉行政における子どもの居場所づくり」 上越市役所健康福祉部子ども課課長・内藤祐子氏 実践報告「子ども食堂における居場所づくりの実践」 いちょう食堂代表　金子光洋氏

平成３０年度

開催日	場所	研修名・講師等
7／31	音 201	教員免許更新講習 選択必修領域（学校，家庭並びに地域の連携及び協働） 「周辺化されがちな特別な配慮が必要な子どもを含めた学校・学級運営」　講師：菅原至・原瑞穂・堀健志・小高さほみ
8／6 午前	2 講 104	「質的研究に関する勉強会：学校現場のフィールドワーク」 講師：お茶の水女子大学名誉教授　箕浦康子氏 桜美林大学教授　浅井 亜紀子氏
8／6 午後	人文 113	講演会「教育の国際化―文化的背景の違う子どもをどう理解するか―」 講師：お茶の水女子大学名誉教授　箕浦康子氏 桜美林大学教授　浅井 亜紀子氏
		「講演会『教育の国際化』を振り返る会」
12／12	人文 207	沖縄報告会 報告者：
1／8	人文 207	合評会『裸足で逃げる－沖縄の夜の街の少女たち－』上間陽子著 発起人：小高さほみ・菅原至・原瑞穂・堀健志
2／16	人文 113 他 町家交流館	公開勉強会：映画『みんなの学校』上映 ＆ みんなの学校 Café 第一部　上映会 第二部　みんなの学校 Café 後援：上越市教育委員会・糸魚川市教育委員会・十日町市教育委員会・妙高市教育委員会
2／28	美術 210	みんなの学校 Café を振り返る会

1.「特別な配慮を必要とする子供たちに着目した学校改善に関する研修の研究」の概要

1．問題関心と研究目的

近年，日本の学校教育において，特別支援教育への関心が高まり，特別支援教育の制度等が充実していく中で，「特別な配慮を必要とする子供」，「合理的配慮（reasonable accommodation)」に関わる文言が教育現場で広がってきている。その背景には，2006年12月に国連総会で「障害者の権利に関する条約」が採択され，翌年日本は条約に署名し，法整備（障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律など）が始まったこと，2012年には中央教育審議会初等中等教育分科会による「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告)」が提出されたことなどがあろう。障害児教育から「インクルーシブ教育」へと転換される中，例えば学校内にスロープを設置するなどの物理的環境整備だけでなく，個人に必要な「合理的配慮」の提供が前提となるなど，教育観のとらえ直しが迫られるようになった。

日本における「インクルーシブ教育」の制度等が充実していく中で，「特別の配慮を必要とする子供」の捉え方に一つの枠がはめられ，「周辺化されがちな子ども」（例えば，外国につながる子ども，性的マイノリティ，家庭に難しい事情を抱えた子どもなど）が見えなくなるのではないか，そもそも「特別な配慮」とは何か，なぜ，ある子どもたちを焦点化し形容するのか，という問いが生まれた。本研究プロジェクトは，メンバーそれぞれの専門領域で生じたそれぞれの問いが出発点なっている。

研究を立ち上げる際には，二つのアプローチを計画していた。第一に，「周辺化されがちな子ども」への対応が必要な学校現場に寄り添いながらの学校フィールドワーク（アクションリサーチも含む）であり，第二は，「周辺化されがちな子ども」に関わる研修等（自主セミナー等の支援も含む）である。本研究プロジェクトを開始するにあたって，平成29年7月には，妙高市教育委員会小林啓一教育長をメンバー3名（菅原，原，小高）が訪問し，これらの研究の可能性を話し合った。その結果，「特別の配慮・対応を必要とする子供」の理解や支援に関わる学校のフィールドワークについて，教育委員会と学校と大学の三者で協働し，学校現場に寄り添いながら，探求していくこととなった。具体的には，学校のフィールドワークは，新たにフィールドに参入せず，メンバーが関わっている妙高市のフィールドで，今後本テーマに関する問題が生じた場合は，本研究プロジェクトが連携していくことの了解を得ることができた。しかし，研究期間中に，連携するまでには至らなかった。

また，妙高市以外の地域の学校における出前授業やフィールドワークを通じて，「特別な配慮を必要とする子供」に関する対応等について新たな情報を得ることはできた。例えば，X市立X小学校では高学年でのLGBTへの対応，県立X高校では外国につながる生徒やLGBTへの教育的配慮，多様な生徒が在籍する高校でのキャリア教育の課題な

どである。ただし，研究プロジェクトとしてのフィールドへの参入には至らなかった。このような経緯により，本研究プロジェクトは，後者の自主セミナーを企画・支援の研究が中心となった。

本研究プロジェクトの目的は，研修テーマを「特別な配慮・対応を必要とする子供たち」に焦点化し，学校臨床社会学の立場から，教員自身が教育観を相対化し，子ども理解や支援の在り方の捉えなおしにつながる研修を検討・実施し，教員自ら研修の場を創り出すことも含めた研修モデルを提案することである。具体的には，「研修」を教員による自主的な勉強会はじめいわゆる悉皆研修などを含めてとらえ，さまざまな学習形態・方法を検討・企画あるいは支援し，必要に応じて専門家や実践者も交えて，大学院生と現職教員がともに学びあう場を培っていく。

２.「特別の配慮を必要とする子供」に関わる教員研修の検討

２-1 学校臨床社会学とは

「インクルーシブ教育」の制度等が充実していく中で，「特別な配慮を必要とする子供」が広がる中で，特別な配慮・対応を求めている子供が困難な状況に置かれるのではないかという懸念がある。たとえば，貧困層の子どもへの支援が「集団の中で顕在化してしまっている不利を隠そうとする消極的なもの」であることをエスノグラフィーの手法から明らかにした盛満（2018）は，「貧困の問題がこれまでほとんど立ち現れてこなかった背景には，こうした『特別扱いしない』学校文化と差異を見えなくするための『特別扱い』の影響があった」と指摘している。同様の知見は，「外国につながる子どもたち」をめぐる研究でも提起されている。ニューカマーの子どもたちを日本人と同様に「特別扱いしない」ことを前提として受け入れている現状がある。

このような貧困層の子どもや外国につながる子どもたちが直面している問題に焦点化した研修を検討するために，学校臨床社会学に依拠していく。学校臨床社会学を提唱している酒井（2007）によれば，「今日の学校教育や児童生徒が抱える種々の問題の社会学的理解と，それへの対応や支援の取り組みの意義ある課題を，社会学的な視点や方法論を用いて検討する」学問領域である。酒井は，学校臨床社会学を「フィールドワークを臨床とする立場，マクロな社会と機能的な関係の中で病理を見出していこうとする立場，構築主義的に問題そのものの成り立ち方から問い直しつつ，問題の捉え方，語られ方をずらしていこうとする考え方」の３つを紹介しつつ，構築主義の重要性を次のように説いている。

> 構築主義では，問題やそれへの対応を考える際，社会一般の問題の捉え方がいかなるものかに常に目配りすると同時に，フィールドにおいては，そのメンバーたちがある独自の考え方を共有していく過程にも注目する。また，研究者がそこに入り込むことで，さらに相互作用が生じて，お互いの認識に変化が生じること

も考えられる。こうして，問題はそれぞれの場において，ある形に構成され，その場の成員にとっての自明の世界を作り上げていく。（酒井，2007）

この構築主義の観点から「特別の配慮を必要とする子供」に関わる教員研修の検討していく。例えば，酒井は，小１プロブレムの問題に関わる幼小連携カリキュラム開発（なめらかな接続）のアクションリサーチを踏まえて，「構築主義的な視点はさらに，我々の子ども観そのものの相対化を促し，彼らへの指導や支援の在り方を再考させる契機を提供する。」（前掲）と，構築主義の観点からの校内研修の意義を述べている。さらに，「教育や生活の現場にある，種々の思い込みを異化し，理解の枠組みを問い直して，新しい対応の方途や問題の捉え方を共有していきたい。」（前掲）と，学校臨床社会学の目指す方向を提起している。

２-2 構築主義の観点からの研修の構想

本研究プロジェクトでは，構築主義の観点から，研修の内容・方法の議論を重ね，「特別の配慮・対応を必要とする子供たち」にかかわる研修のアクションリサーチを進めた。さまざまな方法を模索し，以下の内容，研修形態を実施した。

1)「特別の配慮・対応を必要とする子供たち」とは

議論を重ね，教員がこれまでに経験の少ない／見えない「周辺化されがちな特別な配慮が必要な子ども」の理解と対応・支援の研修に向けて焦点化したテーマは，以下の通りである。

・「社会的な困難や不利（貧困，障害，外国籍などによる）を経験している子どもたち」
・「文化的背景の異なる子どもたち」
・「家庭に難しい事情を抱えた子どもの家族関係や生活世界」
・「どのような子ども包摂する学校」

2) さまざまな形態の研修形式

① 公開勉強会（映画上映，講演と実践報告，意見交流）
② 講演会
③ 合評会
④ 映画上映会＆みんなの学校 Café
⑤ 「教員の自主的な研修の企画運営」・研修スタッフの振り返りの会

2-3 研修事例の紹介；映画『みんなの学校』上映 ＆ みんなの学校 Café の開催

紙幅の関係から，2019 年 2 月に本プロジェクトの総括として開催した研修の概要を紹介する。本研修は「どのような子ども包摂する学校」として，以下のドキュメント映画（『みんなの学校』，監督・真鍋俊永　制作・関西テレビ放送　出演：大空小学校のみ

なさん，2014 年）を取り上げ，「映画上映会＆みんなの学校 Café」形式の研修を企画し，現職大学院生らと共に研修を実施した。

すべての子供に居場所がある学校を作りたい。

大空小学校がめざすのは，「不登校ゼロ」。ここでは，特別支援教育の対象　となる子も，自分の気持ちをうまくコントロールできない子も，みんな同じ教室で学びます。ふつうの公立小学校ですが，開校から 6 年間，児童と教職員だけでなく，保護者や地域の人もいっしょになって，誰もが通い続けることができる学校を作りあげてきました。

すぐに教室を飛び出してしまう子も，つい友達に暴力をふるってしまう子も，みんなで見守ります。あるとき，「あの子が行くなら大空には行きたくない」と噂される子が入学しました。「じゃあ，そんな子はどこへ行くの？ そんな子が安心して来られるのが地域の学校のはず」と木村泰子校長。やがて彼は，この学び舎で居場所をみつけ，春には卒業式を迎えます。いまでは，他の学校へ通えなくなった子が次々と大空小学校に転校してくるようになりました。

出典：映画『みんなの学校』ホームページのイントロダクション
http://minna-movie.jp/intro.php

研究メンバーによる本研修の紹介

2019 年 2 月 16 日に「みんなの学校 café」を開催した。その目的は，「みんなのもの」であるという意味において公共性を帯びた制度であり施設である学校についての理解を深めることにあった。一方で，学校はいかなる意味において「みんなのもの」であると言えるか。他方で，現実の学校はそうした意味において「みんなのもの」でありえているか。さもなければ，いかなる意味において「みんなのもの」でないと言えるのか。さらには，そのような学校が「みんなのもの」となるのを阻んでいるのは何であるのか。「周辺化されがち」な子どもに対して「特別な配慮」や「特別な支援」を供することによって学校は「みんなのもの」になるのか。

こうした論点をめぐって思考を深めることを目的として，本学大学院専門職課程・修士課程の双方から募った学生らとともに，「みんなの学校 café」実行委員会を立ち上げ，真鍋俊永監督による映画『みんなの学校』を公開上映し，視聴後に参加者とともにトークシェアを行った。時間の都合もあり，議論を十分に深めることができたとは言えなかったものの，参加者のそれぞれには，少なくとも「みんなの学校」とは何であるかという見過ごされがちな，しかし本質的な問いに直面する場を提供できたと考える。

堀　健志

3．今後の課題

本プロジェクトでは，「周辺化されがちな特別な配慮が必要な子ども」の困難な状況を改善するための教員研修プログラム開発の一助となることを目指して，「周辺化されがちな特別な配慮が必要な子ども」の理解につながる研修，支援・対応のもう一つの物語を教員との交流から語りあう研修を，異なる形態・方法を試みた。一連の研究過程で明らかになった主な課題は，以下の４点である。

①「周辺化されがちな子どもたち」の生活世界および歴史的・社会的背景の理解不足
②「周辺化されがちな子どもたち」が直面する困難な状況を想定することの難しさ
③「周辺化されがちな子どもたち」をマイノリティとしてみなすマジョリティの無自覚
④「周辺化されがちな子どもたち」の支援に関わる学校内外の協働や連携の困難さ

これらの課題を乗り越えるための今後の課題は，①「特別な配慮・対応が必要な子ども」の具体的な実践事例に基づく対話を重視した研修プログラムの開発，②「特別な配慮・対応が必要な子ども」に焦点化した教員養成課程の授業の検討である。また，「特別の配慮・対応を必要とする子供」の理解や支援について，現職教員や教員を目指す学生と教育委員会，大学，地域の方々など対話する場を試みてきた。今後も，③教員が自ら，多様な人々と対話する「特別な配慮を必要とする子供」の自主セミナー支援の可能性を探っていく。
尚，本研究プロジェクトのメンバーが，ここで報告した研修の場で出会った実践者が直面している問題にどのように応答したか，あるいはフィールドに参入しどのように関わっている／関わったかは，別稿で論じていきたい。

文責　小高さほみ

2. 講演会「教育の国際化―文化的背景の違う子どもをどう理解するか―」発表資料

2-1 箕浦康子先生（お茶の水女子大学・名誉教授）発表資料

上越教育大学　2018. 8. 6.

教育の国際化
―文化的背景の違う子どもをどう理解するか―

お茶の水女子大学
名誉教授
箕 浦 康 子

1

グローバル化
モノ、ヒト、カネが国境を越えて自由に動く

教育・介護・職場などで外国人数が増加

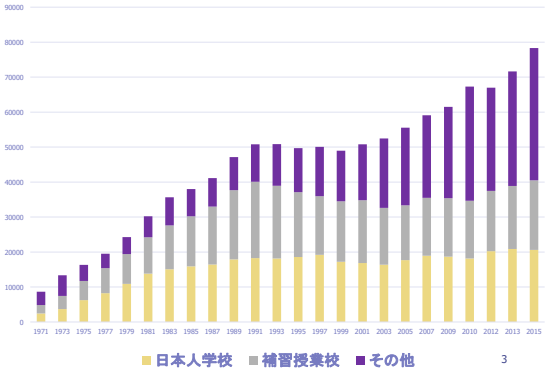
・海外で育つ日本人の子ども
・親と一緒に日本にやってくる外国人の子ども
・留学生　26万7042人　（2017年5月１日現在）
　　13万7700人　（2012年5月１日現在）
・JETプログラムで来日した英語の先生（ALT）
・病院・特別養護老人ホームで働いているインドネシア人・フィリピン人・ベトナム人看護師・介護士

企業のグローバル化

・海外展開を見据えた採用：日本人が海外で働き、日本に外国人社員がやってくる
・社内会議は英語で：ソニー、楽天など

2

海外在住日本人児童・生徒数推移（就学形態別）2015.4.15現在



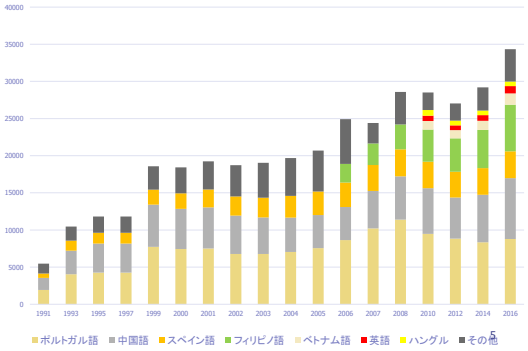
3

日本語指導の必要な児童・生徒

- 2015年4月現在　78,312人の義務教育段階の日本国籍の子どもが海外で生活
- 約1万人余が親の駐在終了とともに日本へ帰国、うち日本語指導が必要な子は、　約25%
- 公立学校に在籍している外国籍の児童は、80,119人日本語指導が必要な子は、　34,335人、地域・母語による偏り大
- 就学ガイドブック（英、ポルトガル語、中国語、スペイン語、ハングル、フィリピノ語、ベトナム語版）、文部科学省発行
  我が国の学校教育、就学手続きについて、学校生活について
  教育相談について

4

日本語指導が必要な外国人児童生徒数　2016年5月1日現在



5

日本在住の外国人がなぜ増えたのか

2017年　256万人（中国　28.5%、韓国　17.6%
　　フィリピンとベトナム　それぞれ　10.2%）

Old Comers（特別永住資格を持つ外国籍者）
　在日韓国・朝鮮籍者、在日中国国籍者

New Comers（1970年代末以降来日の非永住外国人）
1）1970年代末から1980年代前半
　風俗・サービス業従事する女性（多くはフィリピン系）、インドシナ難民、
　中国残留日本人の帰国、欧米系外国企業の駐在員
2）1980年代後半のバブル期、人手不足、イラン、パキスタン、バングラデシュなどから若者が旅行ビザで入国、非正規就労
　バブル崩壊で外国人数は一時減少するも、景気回復とともに
　南米日系人労働者、留学生・就学生が増加
3）1990年代前半から
　国際結婚、アジア系企業の駐在員、IT技術者（インド系、中国系）
4）2010年代の人手不足
　技能実習生，EPA

6

外国人の子どもの教育を なぜ日本の学校で担うのか

日本の大学で、「なぜ外人の教育を日本人の教員がやらなければならないのか納得できない。日本人になって将来も日本で暮らすというのなら納得できる。でも、日本人にはならない、将来日本にいないかもしれないという子どもの教育をなぜ自分がやらなければならないのか」と語る教員志望の学生

アメリカの小学校で、「4，5年後には、日本に帰ってしまう日本人の子どもに英語で、ここで教育することに疑問を感じる。ずーっとアメリカに住むのなら分かるが・・・・」と語る教師

外国人の子どもの就学を断れるのか

7

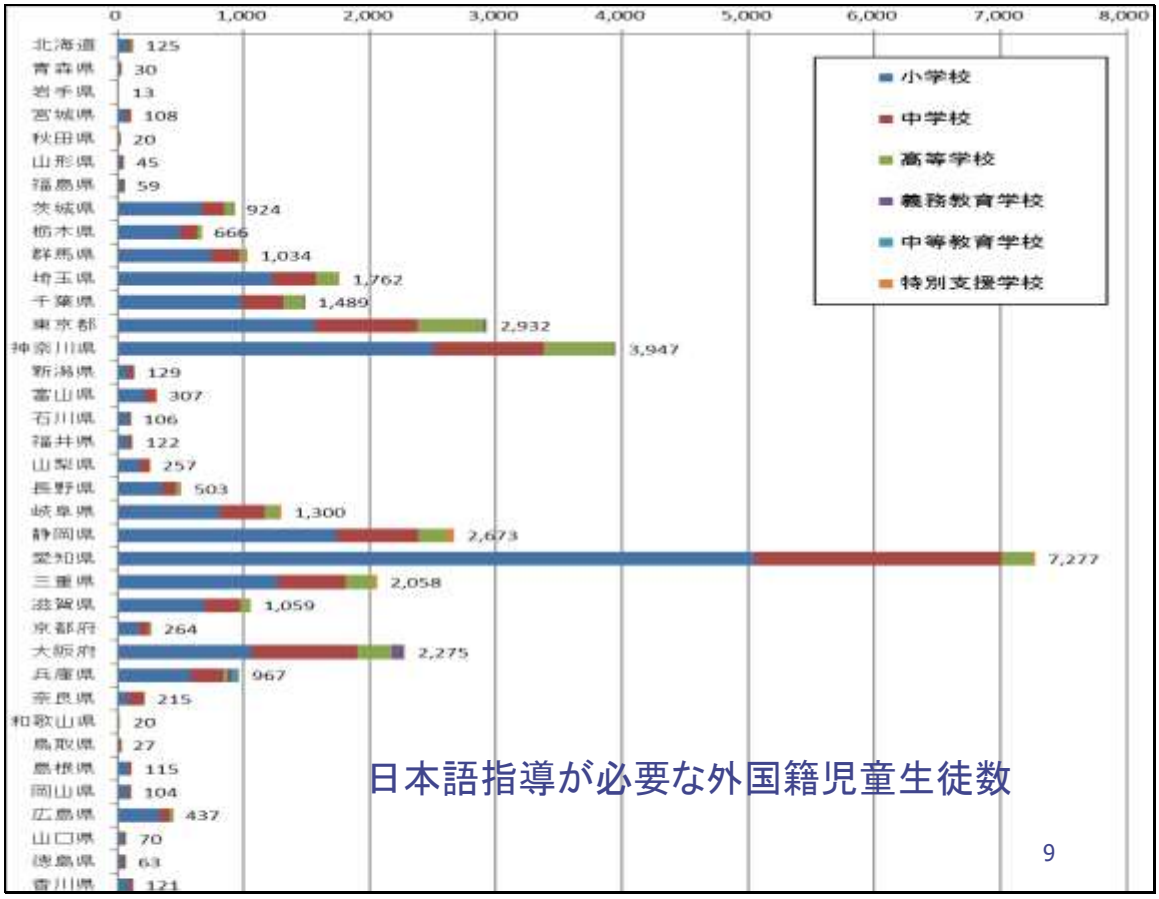
子ども権利条約(1990) 子どもの権利に関する宣言（1959）

子どもの権利は、大きく分けて4つ

1.　生きる権利
2.　育つ権利（第27,28,29条など）
　もって生まれた能力を十分に伸ばして　成長できるよう、医療や教育、生活への支援を受けられる権利
3.　守られる権利
4.　参加する権利

国際人権規約（A、B規約）　人種差別撤廃条約

8



学校に文化的背景の違う生徒が転入してきたら、教師としてあなたはどうする？

◈転入してくる生徒への対応

日本生まれ、日本育ちの子どもたちとは異なる困難に直面している。それはどのようなものか？

◈受け入れ側の日本人生徒への対応

短期的　転入生をクラスにどう迎えるか

長期的　多様性の受容、国際理解教育

10

人は育ちの過程で文化の衣をまとう

◈人は、生物学的・歴史的・文化的被規定性のなかに生きる存在である。

◈そうした規定性を受けながら、さまざまな経験を重ねるプロセスで、自分の文化的意味世界（文化の衣の内実）を築いていく。

育ちの場にある文化的意味を摂取することで、その土地の人となる、すなわち、その土地の文化の衣をまとう。

11

文化的意味とは？

「文化的意味」は日常の行動に埋め込まれている
自文化での暮らしのなかでは、それを意識しない

引越し習慣
挨拶
車で送ってもらった時
誰がエレベーターから先に降りるか？
家族とは？
人との付き合い方、食事のマナー

12

文化間移動で、文化の衣の違いに気づく

◈物理的・生態的環境

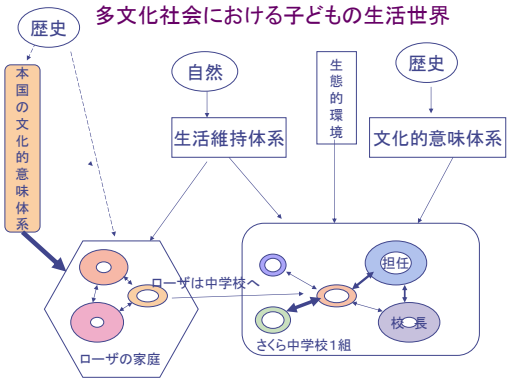
◈社会的環境：　学校、家庭、行政組織など

◈内面的環境（文化の衣）

前2者を抜け出し、内面的環境を抱いて異なる国の生態的環境・社会的環境に身をおくこと

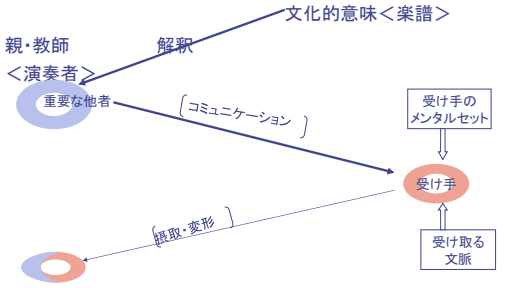
13

多文化社会における子どもの生活世界



14

二重文化的環境での個人のハイブリッドな意味空間の形成



他者と関わる中でものの見方（思考や知覚の枠組み）が出来てくる

15

文化の衣は、他者と「関わり合う」ことで形成される。

- マクロレベルの意味体系：**楽譜**
- 重要な他者としての親・保育者・先生・近所の人など
  ：楽譜の**演奏家**
- コミュニケーション　：**演奏**

- 変形：
  コミュニケーションの内容は、
  受け手のその時のメンタルセットや
  コミュニケーションが行われる文脈によって
  変形される

16

ブラジルの学校：日本との違い

- ブラジルの学校は、2部制が多い
  1部　7:00～12:20、　2部　12:30～17:30
  実質授業時間は4時間程度、年間授業日数　180日
- ブラジルの義務教育は、7歳から14歳までの8年間
  教育制度の改正により2006年から2010年までに9年制へ移行
- 掃除とか給食の配膳は日本では生徒、ブラジルでは、係りの大人、課外活動はほとんどなし
- 広大な国土と大きな地域差
- 女子校はない（女子校は共学化）
- 義務教育未修了者が多い（留年、中途退学多い）
  青年成人教育ｽｯﾌﾟﾚﾁｰｳﾞｫ（補償教育）制度
  15歳以上の人に規定の半分の4年間で義務教育を修了させる、中等教育未修者に科目別に課程を修了させる制度
- 九九は、ブラジルは10x10、ベルーは12x12まで
- 日本または外国からの転入児童には特別プログラムは用意されていない

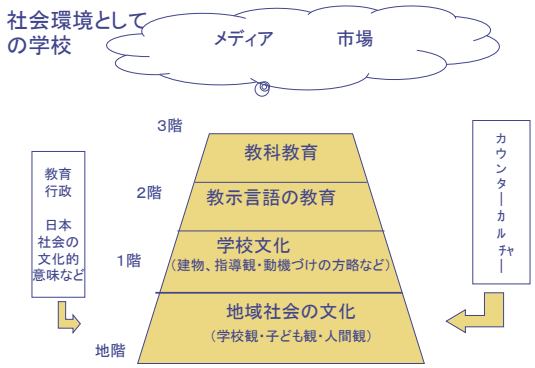
17

アメリカの学校：日本との違い

- 国語：クラス全員が同じ教科書を使っていない
  それぞれのグループに会った教科書
  教師2人による巡回授業
- 音楽や体操の時間
- 入学式、卒業式がない
- 教員室はないが、校長室はある
- 下駄箱はない　トイレはどこだ？
- 先生がいない教室には鍵
- 罰の与え方（フルネーム、分離、校長室送り）

18

社会環境としての学校



梶田正己(1993)「我が国の学校教育の特徴ー三階建てからイメージすると」信濃教育1285号

19

文化的背景の違う児童が直面する問題

- 日本語による教科学習の難しさ
  - 出身国と日本のカリキュラムの違いを埋める困難さ
  -日本語習得に追われ、教科学習が手薄
- 日本語（教示言語）習得の困難さ
  -話せても「読み」「書き」は苦手　（学校での日本語指導不十分）：下記の2つを区別すること
  CALP（Cognitive/Academic Language Proficiency）
  BICS（Basic Interpersonal Communication Skills）
- アイデンティティの揺れ
  家庭（親）の文化と日本社会の同化圧力
  -日本社会の排他性（外国姓を名乗ることに対して）
  -学校でのイジメ

20

それぞれ違う家庭の文化、家族のテーマ

出典：志水・清水　2001「ニューカマーと教育」明石書店

	日系南米人	インドシナ難民	韓国系ﾆｭｰｶﾏｰ
来日動機	出稼ぎ（経済的要因）	難民として（政治的要因）	上昇志向（社会的要因）
テーマ	一時的回帰	安住	挑戦
学校観	日本文化伝達の場、期待	学校へ依存	異文化体験として重視
母語・母文化	積極的 集住の効果	積極的だが 子どもは日本化	積極的 上昇の資源

21

受け入れ側の多数派の生徒に対して 多文化共生社会に向けての教育(1)

多文化共生社会は、おのずから成立するものではない。
異なる文化的伝統に橋を架ける仕事。
より平等で公正な多文化社会を目指す教育

- 肯定的自己概念の形成と拡張
  - 自尊感情(self-esteem)
  - 意識の空間的・時間的拡がり
- ものの見方、感じ方、考え方は人により違う
- 多様性の受容

上記の理念を教育実践にどう落とし込むのか？

22

多文化共生社会に向けて(2):地球市民教育

達成可能な地球的視野の５次元（Hanvey, 1982）を教育実践にどう取り入れるか

1) 自分がどのように世界を見ているのかへ気づき（perspective consciousness）自己の偏見への気付き
2) 地球の現状への気づき（state of the planet awareness）
3) 異文化への気づき（cross-cultural awareness）
4) グローバル・ダイナミックスに関する知識（knowledge of global dynamics）
5) 人間の選択に地球の将来が懸かっていることへの自覚（human choices awareness）

Hanvey,R.G.(1982) *An attainable Global Perspective*, Global Perspective in Education, Inc.

23

図工による自己理解・他者理解の深化

絵画、彫塑、工作、デザインなどの多面的な造形表現を通じて「自分でもできるんだ」という自己肯定感を得る。
自分のイメージに沿った作品ができた時の達成感

- 自画像:モデルである自分に意識が向かい、心と表情に関心を持つようになり、自己および他者との共生を考えることに繋がる
- 友達の頭像

  友達を通して人間の表情や内面との関係を認識する
- 自分たちのメッセージを伝えるポスター作成

  社会科の単元「地球環境と世界の平和」の学習と連携した図工科での作品制作

24

国際(異文化)理解教育の実践例:文献

幼児・小学校低学年
- ファウンテン,S. (1994) いっしょに学ぼう―学びかた・教えかたハンドブック
- ダーマン・スパークス,L. (1994) ななめから見ない保育:アメリカの人権カリキュラム　解放出版社

小学校高学年
- 棚橋和正(1998)図画工作科の授業実践と教師の意識変容　異文化間教育 12号、18-31.　棚橋(2010) 図工科プログラム学習「夢と共生」　創友社
- 宇土泰寛(2000) 地球号の子どもたち　創友社.

幼・小・中学生
- 箕浦康子(1997)地球市民を育てる教育　岩波書店.
- 小林　亮(2014) ユネスコスクール:地球市民教育の理念と実践　明石書店

高校生
- 鹿野敬文(2003)高校生の知的な対話力育成の試み―援助計画案の作成と新しいディベートの活用を通して―　異文化間教育　18号、109-118.
- 大津和子(1992)国際理解教育:地球市民を育てる授業と構想　国土社.

25

問われているのは、我々の異なるものへの対し方

- われわれが意識することのない「日本人であることの意味」、「日本人であること」からくる自文化中心主義的なモノの見方や考え方、政治的・経済的・文化的な特権に自覚的になること
- 相互理解の本質は、「他者との出会いによる自己の変革と＜わたしたち感覚＞の形成」
- 教師自身が、特権に無自覚なマジョリティ人なっていないか問い直してみる

グッドマン,D.J.　出口真紀子（監訳）(2017)　真のダイバーシティーをめざして：特権に無自覚なマジョリティのための社会的公正教育　上智大学出版会

26

2-2　浅井　亜紀子先生（桜美林大学・教授）発表資料

上越教育大学　2018.8.6.

教育の国際化
―ALTとどのように関係を築くか―

浅井亜紀子
（桜美林大学　リベラルアーツ学群）

1

1

本発表のテーマ

1. 日本の学校で教えるALTはどのような人か
2. ALTは日本の学校で何に違和感を感じるのか
3. JTEとALTがよりよい関係性を築く条件とは

2

2

1. 日本の学校で教えるALT

- JETプログラム
- 直接任用
- 労働者派遣契約
- 請負契約
- その他（留学生や地域の英語が堪能な人）

3

3

JETプログラムについて

「語学指導等を行う外国青年招致事業」
（Japan Exchange and Teaching Programme ）

意図
- 外務省：　対米貿易黒字対策
- 旧文部省：英語教育改革
- 旧自治省：地方都市の国際化

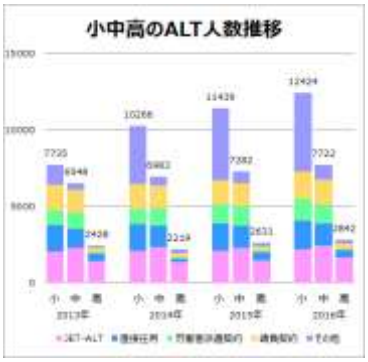
公立学校でのティームティーチングとして導入(1987)

「外国語指導助手」: ALT（Assistant Language Teacher）

「日本人英語教師」: JTE（Japanese Teacher of English）

4

4



JETのALTの占める割合は、小学校は低く高校で高い　(文部科学省, 2016)

5

5

JETプログラム参加人数の変化

累積
73カ国　68,000人

（CLAIR, 2018）

6

6

JETプログラム参加者
(54か国から, 2018-2019)

アメリカ	3,012	
カナダ	566	
イギリス	513	
オーストラリア	355	
ニュージーランド	240	
アイルランド	113	
その他	729	
合計	5,528	(人)

7

JETのALT応募条件

- 大学の学士号取得者。
- ALTの場合、3年以上の初等学校若しくは中等学校の教員養成課程修了者、又は見込み者。
- 指定言語について、現代の標準的な発音、リズム、イントネーションを身につけ、正確かつ適切に運用できる優れた語学力、論理的に文章を構成する力がある。

- ※　次のような要件の該当者には選考にあたり一定の評価が与えられる。
- 1) 語学教師としての経験又は資格を有すること。
- 2) 教職経験又は教職資格を有すること。
- 3) 高い日本語能力を有すること。

TESOLなど英語教員の資格者、英語や英語教員の学位所有者が4割近くいる（吉田, 2014）

8

2. ALTは日本の学校で何に違和感を感じるか？

① 職務責任のあいまいさ

② 生徒の授業参加態度

生徒の受身な授業態度
規律を守らない（おしゃべり、居眠り，携帯）

→ALTは自己効力感*を低く感じる

＊自己効力感：目的達成する可能性についての個人の信念
(Bandura, 1977)

9

2-① 職務責任のあいまいさ

ティームティーチングの3つのパターン

JTE主導（ALTは「使われていない」）

ALT主導（ALTにおまかせ）

JTEとALTの協働

10

中学校ではたらくJTEに対して問題意識のあるALTの理由

半数のALTが日本教員との間に問題を抱えている」と認識。その7割が「使われていない」

（吉田, 2015,p.73)

11

2-① 職務責任のあいまいさ

・ALTの職務「アシスタントとしてJTEのカリキュラム作成、授業マネジメントをサポートすること」

・どのパターンをとるかは、JTEがALTをどのようなものとして認識するかによる

・JTE主導の理由：JTE多忙、ALTが複数校かけもちしている（訪問スタイル）

・ALT主導の理由：JTE自身が英語力や教育スキルに限界感（ALTのパフォーマンス力、その場で役立つネイティブの英語）。

→ ALTに教育スキルがありJTEがサポートする場合は問題ない。規律統制は問題。

12

2-② 生徒の授業参加・規律

・クラスマネジメントの仕方の違い

・西欧では、教員によるコントロール

「教師は生徒が学習する安全な場所を提供し、『学ぶ権利』を保障すること。クラスコントロールは民主主義を守ること」（カナダ人ALTジェームス）

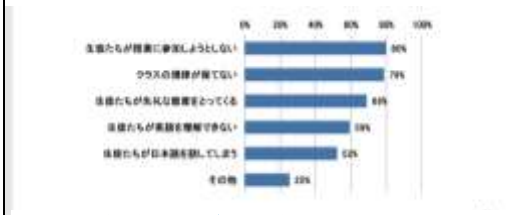
・日本での『学ぶ権利』

「生徒をクラスの外へ出してはいけない」

（ジェームスの勤務校の副校長先生）

13

中学校ではたらくALTの生徒に対する問題意識を感じる理由



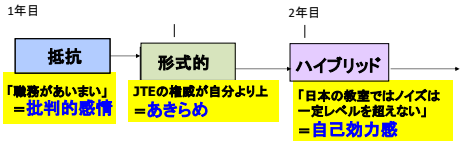
約4割のALTが問題を感じている。
その8割「生徒の授業参加」が「クラスの規律」に問題を認識

（吉田, 2015,p.73)

14

ALTはどのようにクラスコントロールしたか

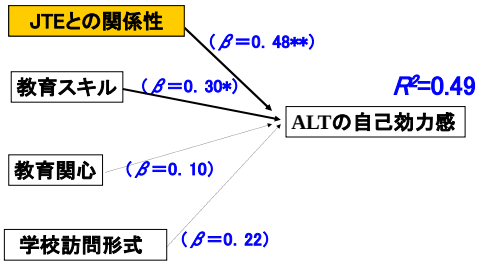
ジェームスの場合



(浅井, 2006)

15

3. JTEとALTとのよりよい関係性を築く条件とは



(浅井, 2006)

16

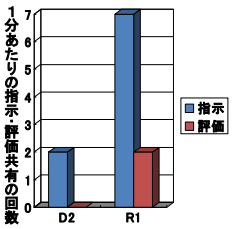
授業での「協働」への影響因

		D2（ALT主導）	R1（協働）
JTE	ALT表象	「エンターテイナー」「プロの英語教師」	「パートナー」
JTE	教育スキル	英語力の限界感	英語上達の実感
ALT	自己効力感	中	高
ALT	教育スキル	低	中
ALT	教育関心	中	中
		（エマ）	（チャールズ）

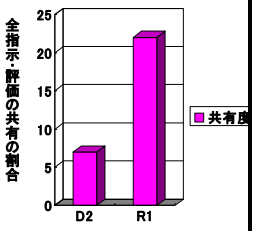
(浅井, 2006)

17

授業でのJTEとALTの関係性：ビデオ分析



ALTとJTEの指示・評価の共有の頻度



ALTとJTEの指示・評価全体に対する共有の割合

(浅井, 2006)

18

3. JTEとALTとのよりよい関係性を築く条件とは

1. ALTの教育スキル・関心・ニーズの理解
   - ・ALTに対する固定観念や過度な期待をもたない
   - ・ALTの教育経験やボランティア経験の理解
   - ・ALTの職場環境におけるニーズの把握
2. JTEの教育スキル向上
   - ・自身の英語力、英語教育スキルを高める
   - ・多様な生徒に対応するクラスマネジメントスキルの向上
   - ・JTEの研修制度の充実

19

3. ALTの教育スキルのアップ

・英語教育、クラスマネジメントについてのより深い理解

4. ALTとJTEとのコミュニケーションの確保

・教育目的の共有を図る

・ALTとのカリキュラム作成、授業実際、評価の役割分担を話し合って決める

5. 構造的制約を超えるグローバルな視点の模索

・学校環境、管理環境を越えた発想でグローバルでALTに協力する（ALTの国際ボランティア、ALTどうしのプロジェクトの支援と授業への活用）

20

引用・参考文献

浅井亜紀子（2006）異文化接触における文化的アイデンティティのゆらぎ，ミネルヴァ書房

Bandura, A.(1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. Psychological Review, 34(2), 191-215.

CLAIR*（一般財団法人自治体国際化協会）(2018) The Japan Exchange and Teaching Programme, http://jetprogramme.org/ja/

石野末架(2017) 退職を選んだ外国人指導助手（ALT)が語るティームティーチングの課題：アクティブ・インタビューを用いて，言語文化共同研究プロジェクト，33-42.

吉田研作(2015)小学校・中学校・高等学校における ALTの実態に関する大規模アンケート調査研究 中間報告，http://pweb.cc.sophia.ac.jp/1974ky/Interim%20report%20of%20ALT%20Survey%202014.pdf

* Council of Local Authorities for International Relations

21

3. 本プロジェクト研修の概要

3-1 公開勉強会

(1) 映画上映会，講演，実践報告

研修題名	「さとにきたらええやん」上映会＠上教大　公開勉強会
日時	2018 年 2 月 22 日（木）12:45－13:45　スタッフ勉強会 21 日（水）17 時～
場所	上映会：講義棟 201 教室　（スタッフ勉強会：自然棟 303 室）
発起人	「さとにきたらええやん」上映会@上教大実行委員会 （本学大学院生有志の会）
運営	・「さとにきたらええやん」上映会@上教大実行委員会 委員会メンバー：石山崇・川村修央・熊倉和耶・三田村尚子 ・プロジェクトメンバー：小高さほみ・菅原至・原瑞穂・堀健志
主催	・本プロジェクト ・「さとにきたらええやん」上映会@上教大実行委員会
共催	児童文化研究会　子ども食堂スタッフサークル（学内団体）
後援	妙高市教育委員会
参加者	講師：他大学教員 1 名，シンポジスト：2 名 講演（神田外語大学講師　知念 渉 様） 実践報告（上越市役所健康福祉部子ども課課長　内藤 祐子 様） 実践報告（いちょう食堂代表　金子 光洋 様） 本学：院生 15 名・教員 4 名，学外：地域住民 18 名・教員 1 名・行政 1 名
周知方法	チラシ配布：学内，学外 本学クラウドポータルサイト＞お知らせ＞大学からのお知らせ
経費	公費：講師の旅費・宿泊費・謝金，テープ起こし費 私費：茶菓子，ランチミーティング昼食代

(2) 講義と演習

研修題名	「質的研究に関する勉強会：学校現場のフィールドワーク」
日時	2018 年 8 月 6 日（月）午前中
場所	上越教育大学 2 講 104 教室
講師	箕浦 康子氏（お茶の水女子大学・名誉教授） 浅井 亜紀子氏（桜美林大学・教授）
主催	上越教育大学　小高さほみ・原瑞穂
参加者	本学：院生 9 名，大学教員 3 名，附属教員 1 名
周知方法	授業・ゼミにて開催予告（対象は大学院生）
経費	公費：講師謝金，図書購入費 私費：送迎タクシー代金，茶菓子，ランチミーティング弁当代，歓迎会費

3-2　講演会

研修題名	講演会「教育の国際化」 （1）「教育の国際化―文化的背景の違う子どもをどう理解するか―」 （2）「教育の国際化――ALT とどのように関係を築くか―」
日時	2018 年 8 月 6 日（月）13:30～15:30
場所	上越教育大学　人文棟 113 教室
講師	箕浦 康子氏（お茶の水女子大学・名誉教授） 浅井 亜紀子氏（桜美林大学・教授）
主催	上越教育大学　小高さほみ研究室・原瑞穂研究室
ボランティア	会場：五十嵐はるか・内田真人・金子稀依・河合弘樹・草間智海， 待機室：針山美希
参加者	本学学生 20 名（院生 19 名，学部生 1 名） 他機関 8 名（現職教員 4 名，他大学教員 2 名，上越国際交流協会 1 名） 本学教職員 7 名（職員 1 名，プロジェクトメンバー3 名含む）
周知方法	本学クラウドポータルサイ・大学からのお知らせ チラシ配布（学内：授業，ランプ，免許更新講習，学外：教員研修など） バイリンガル教育関連のメーリングリスト
支出費目	公費：講師の旅費・宿泊費・謝金， 私費：茶菓子

3-3　合評会

研修題名	沖縄報告会，合評会
日時	報告会：2018 年 12 月 12 日（水）14：40～17：00 合評会：2019 年 1 月 8 日（火）10：20～12：30
場所	上越教育大学　人文棟 207 教室
発起人	プロジェクトメンバー：小高さほみ・菅原至・原瑞穂・堀健志
合評会図書	『裸足で逃げる－沖縄の夜の街の少女たち－』上間陽子，太田出版
参加者	報告会：大学院生 7 名，プロジェクトメンバー4 名 合評会：大学院生 5 名，講師 1 名，プロジェクトメンバー4 名
支出費目	公費：合評会の図書費

3-4　映画上映会と「教育を語る Café」

研修題名	映画『みんなの学校』上映 ＆ みんなの学校 Café
日時	2019 年 2 月 16 日（土）　第 1 回 13：00～16:00（開場：12:30 より） 第 2 回 17：00～20：00）
場所	第 1 回：上越教育大学　人文棟 113 教室・114 教室（キッズ用） 第 2 回：町家交流館高田小町　多目的ホール）
発起人	プロジェクトメンバー：小高さほみ・菅原至・原瑞穂・堀健志
運営	プロジェクトメンバー：小高さほみ・菅原至・原瑞穂・堀健志 ボランティアスタッフ：五十嵐はるか・一木玲於奈・内田真人・太田美里・大淵利枝子・管野まいか・後藤弦・炭谷倫子・藤田寛樹・水野航・宮崎美樹・與儀真理子・横田恵 PC テイク：宮崎美樹・横田恵
主催	本プロジェクト
後援	上越市教育委員会・糸魚川市教育委員会・十日町市教育委員会・ 妙高市教育委員会
周知方法	・本学クラウドポータルサイト＞お知らせに投稿 ・学内ポスター掲示 ・後援の教育委員会のポスター掲示及びチラシ配布 ・運営スタッフによるチラシ配布，ポスター掲示 ・これまでの公開勉強会や講演会参加者へのメール配信（希望者のみ）
上映素材	『みんなの学校』106 分，配給・合同会社東風
参加者	第 1 回 50 名 学内：院生 10 名，現職院生 6 名，教職員 8 名 学外：教員 9 名，市教委 1 名，市職員 1 名，高校生 1 名，子ども 5 名 第 2 回 13 名 学内：院生 3 名，現職院生 4 名，教職員 1 名 学外：教員 5 名，
支出費目	公費：宣伝材料（チラシ，ポスター） 上映素材（バリアフリー版ブルーレイ・ディスク） 私費：町家交流館高田小町使用料，Café 用茶菓子・紙コップ等，通信費

3-5　研修企画・実施を振り返る会

研修題名	講演会「教育の国際化」を振り返る会
日時	2018 年 8 月 6 日（月）15:30～16:30
場所	上越教育大学　人文棟 113 教室
講師	箕浦 康子氏（お茶の水女子大学・名誉教授） 浅井 亜紀子氏（桜美林大学・教授）
参加者	本学院生・学外参加者など プロジェクトメンバー：河野麻沙美・小高さほみ・菅原至・原瑞穂・堀健志
支出費目	公費：講師謝金 私費：茶菓子

研修題名	みんなの学校 Café を振り返る会
日時	2019 年 2 月 28 日（木）10:00～12:00
場所	上越教育大学　美術棟 210 教室
参加者	本学院生・学外参加者など プロジェクトメンバー：小高さほみ・菅原至・原瑞穂・堀健志
支出費目	公費：テープ起こし費

以上